

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2001年1月 NO.99



「一步前進」 巖 永

〈もくじ〉

2001年高知城築城400年の記念すべき年……………	岡内秀一	2
気軽に身近で感動を—相模原音楽家連盟の活動— ……	小笠原成光	3
星は土星と流れ星……………	岡村啓一郎	4~5
新春随想 セレンディピティー……………	澤村榮一	6~7
へび探し……………	門田智恵美	8~9
こんなことがあったぞね・豪気節が街に流れて ……	中山俊子	10~11
五年後に面白い仕事ができますように……………	野並良寛	12
涙の学芸員ブルース(2)……………	松本教仁	13
風俗歳時記・風伯……………		14~15

(財) 高知市文化振興事業団

二〇〇一年 高知城築城 四〇〇年の記念すべき年

岡内秀一

二〇〇一年、高知市の中心高坂山(標高四四・四メートル)にある高知城は、一六〇一年(慶長六年)九月の築城開始より四〇〇年の記念すべき年を迎えます。高さ十八・五メートルの天守閣に立つと高知市のほぼ全体が眺められます。現在の高知城のある場所には、南北朝時代に大高坂氏が高坂城を築城したといわれておりますが、この城は四方に城門を備えた程度で砦といった方がふさわしいものであったようです。

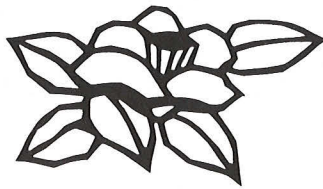
一三三六年(建武三年)、城主の大高坂松王丸が南朝方に属し北朝方と城の追手門で戦って以来、南北朝の戦いがこの城を拠点としてたびたび繰り返されたようですが、一三四〇年(暦応三年)、一月、大高坂松王丸が戦死し、大高坂城は落城しました。

その後一五八八年(天正十六年)

冬に長宗我部元親(一五三八―一五九九)が岡豊城(現在の南国市)から大高坂山に居城を移し城下町を築こうとしたが、度重なる水害に悩まされ、わずか三年で浦戸城に移っています。

関ヶ原の合戦(一六〇〇年)の功績により遠州掛川六万石から土佐二十四万石に封ぜられた山内一豊(一五四五―一六〇五年)は一六〇一年一月八日土佐に入国後、一旦浦戸城に入城しましたが、手狭な浦戸城から大高坂山に城を移すことにし、同年六月百々越前守安行を御城惣奉行に任じ、九月築城工事が開始されました。一六〇三年(慶長八年)に本丸と二の丸が完成し、一豊は大高坂城に移り河内山と改めました。三の丸は一六一一年(慶長十六年)に完成しましたが一豊はその完成を見ず一六〇五年(慶長十年)九月二十一日土佐入

国後僅か五年、六十一歳で逝去。その後高知城は一七二七年(享保十二年)二月一日高知城下大火にあい、追手門の他数棟を残し焼失しました。八代藩主山内豊敷は、一七二九年(享保十四年)に復旧に着手し、一七五三年(宝暦三年)に再建しました。これが現在の高知城です。



財保護法の成立によって昭和二十五年に重要文化財に格付けされました。何度か修復はしているが江戸時代からの天守閣が残っているのは全国で十二城、追手門と両方が残っているのは三城しかない貴重な城郭です。土佐の風土と文化を育んできた高知城は、全国に誇れる文化遺産である

気軽に身近で感動を

相模原音楽家連盟の活動

小笠原 成光

高知県東部の奈半利町出身の私は、昨年の四月から、「グリーンホール相模大野」(文化会館)へ勤務することになった。



相模原音楽家連盟のメンバーによるコンサート

当ホールは昨年創立十周年を迎え、年末にはのべ利用者数四〇〇万人を数えた。芸術文化をまちのにぎわいづくりに結び付けようと、クラシックや軽音楽、演劇など年間七〇本近くの事業を行い、それも市民が鑑賞しやすい価格で提供している。

さて同じく、十年の歩みを共にした「相模原音楽家連盟設立十周年記念」の相模原室内合奏団演奏会が九月十六日「グリーンホール相模大野・オーブン十周年記念」事業として行われ、ゲルハルト・ボッセさん指揮のもと、歌劇「フィガロの結婚」序曲ほか演奏された。終了後のパーティーで、ボッセさんが「CDやテレビなどではなく、生の音楽をともかく聞くように、そして、演奏家は、思いを込めて伝えるように演奏して欲しい」とあいさつしたのが印象的だった。

「地域の宝」ともいわれる連盟の活動ぶりについて、連盟発足以来、事務局長をされている樋口美佐子さんにお話を伺った。

「地域にクラシックの愛好家のすそ野をもっと広げたい。質の高い演奏を安く提供したい。若い音楽家に発表の場をつくりたい」などの願いから呼びかけたところ、「音楽家として地域に貢献できる機会があれば」とおっしゃって参加していただいているという。

参加の方は、N響をはじめ在京のオーケストラ、歌劇団で活躍している人やフリー・ミュージシャンなど。その人達、自らが地域でのコンサートの企画・運営までを行っている。ホールでの年間五〜六回のコンサート、公民館への出張コンサート、公園の芝生の上での年間三回のコンサート、学校コンサート、依頼に応じた出張コンサートや音楽家の派遣、文化財団と共催のほかの自主コンサートなど、身近な場所へ出向く、数多くの活動をしており、それぞれのコンサートの催しごとに企画委員会を設けて、場面に応じた選曲と出演者の選定をしているとのこと。ことに公園の行事に合わせた野外コンサートは、若い親子連れを対象

と共に、鷹城の別名で呼ばれるその秀麗な姿は、高知のシンボルとして人々の心に深く息づいています。今年築城四〇〇年という記念の年、そして二十一世紀という新しい時代の幕明けの年、さらにはよきこい国体の前年にあたる記念すべき年となります。この節目の年に私共は二十一世紀に発展するすばらしい城下街高知のまちづくりに取り組むべきです。住民が行政と一体となり、多くの人々の参加で先人達から受け継いだ高知城を中心とした土佐の歴史、文化、暮らし、産業、教育、芸能などに対する認識を深め、さらにそれをより高め、貴重な財産として次世代へ引き継ぐことです。記念行事として、お城まつりや高知城新能郷土芸能大会、よさこい祭り、一豊公・千代様サミット、全国龍馬ファンの集い、山内一豊入国四〇〇年共同企画展など一年間を通じて各種の催しを実施します。大晦日から元旦にかけての高知城での「二十一世紀カウントダウン」ではじまる一連の取り組みが、楽しさと、ともに次の世代へ歴史的財産を引き継ぐ厳粛さを持ったものとなることを願っています。

おかうちひでかず/高知城築城
(四〇〇年記念事業実行委員長)



に、初めて生の音楽にふれる楽しい機会となって好評のようだ。愛好者のすそ野を広げる、アウトリーチ活動をしつかりと行っている。このような活動がもっとも身近で行えるように、私もひとりの市民として活動の応援グループづくりをしたいと思ったのだった。

高知のみならずにも、「相模原室内合奏団」の演奏会を聞いていただく機会があれば幸いです。どうぞ、お声をかけてください。

グリーンホール相模大野のホームページ
<http://www.hall-net.or.jp>

おがさわらしげみつ/相模原市
民文化財団総務課長兼文化会館
長

星は土星と流れ星

岡村啓一郎



すばる望遠鏡ドーム(左)とケック望遠鏡ドーム (ハワイ島マウナケア山頂、2000年8月19日)

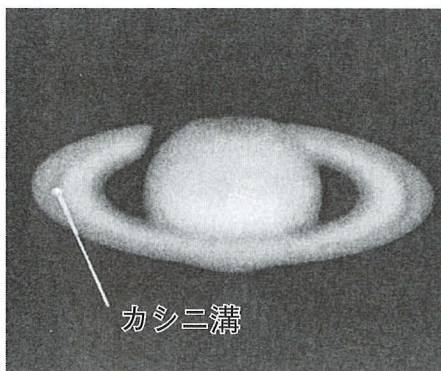
小学校五、六年ごろ、購読していた雑誌『子供の科学』に時々惑星の話がでており、望遠鏡で見た土星リングや月のクレーターの写真などを見るうち自分の望遠鏡で土星リングやカシニ溝などを見たいと思うようになった。その後、単レンズのガリレオ式から出発して、昭和十七年、十七歳のとき戦争中の物資不足のなかで、苦心して作った手磨きの反射望遠鏡第一号をつかって、やっと土星のリングをとらえて嬉しかったのを思い出す。

時々参加させてもらう観測会で、土星の姿を二〇〇倍位で見せてあげると「ヒエーまるで漫画みたい、ノ」とアイピースをのぞいて、たいていの人が感嘆の声を上げる。また観測中、突然に流星が飛んだときなど参加者のウォーというどよめきと歓声はおもしろい。土星と流星は天体観測のうちで、最も人々に好まれ、だれがいつ見ても楽しいものである。

昨年十一月十七日某テレビ局から、「今夜しし座流星群があるのでお話を……」というのでインタビュをうけた。そのとき夜明けのしし座に注意と話したのだから、午前三時ごろ、ふと目が覚めた際、外に出てみた。曇りと思つた空は綺麗に晴れているではないか。とその時、北斗

七星の真ん中を断ち切るように大流星が飛び、その飛跡を逆に辿ってみると、南東の空高いしし座の星付近にびったりと合致している。月齢二二の下弦の月が、星の西二〇度にあつて観測条件は悪いが高知の空に似ず大気は清澄、結局、星図片手に五時三〇分まで頑張つて十数個の流星をとらえた。飛跡がどれも、びたつと放射点に集中するのには、さすが、しし座流星群と感心する。放射点近くで南に飛んだ一個は雲状の痕跡をしばらく残していた。

しし座流星群は、周期三三・二年のテンペル・タートル彗星の軌道上に残された流星物質が地球に突入し、大気と摩擦して発光するもので、毎年十一月十七日ごろ発生し、三十三年ごと、彗星本体が地球軌道面を南



カシニ溝

に通過する前後に大発生することがある。当然、昔からこの流星群は三

十三年周期で発生していたわけで、わが高知県には、いまから九周期ほど昔の観測記録が残っている。この時の記録は世界的にも珍しく、それは次のような内容である。

『六日午ノ正ノ三刻 北奉公人町 東一町失火延焼シテ郭内ニ及ビ 公屋ヲ焼テ十二所 土ノ館百七十宇余 東町一字ヲ残サズ凡二千軒 死傷甚ダ多シ 亥ノ時止ム、 亥ノ時流星 井宿東南第二星ニ墜ル 繚縵布ノ如シ 数刻ヲ経テ消ス 凡今夜流星雨

おうし座にいる木星と土星(2000年9月26日)



いちばん大きな星が木星で、その右上が土星、土星の左上がすばる、木星の右下がアルデバラン

ノ如シ』 *北奉公人町：弁形付近 井宿：ふたご座 亥の時：午後十時

この記録は、高知市秦泉寺に住んだ谷秦山(一六六三—一七一八)が元禄年間に作成した「元禄七曜暦」という天文暦の元禄十一年十月の欄外の書き込みである。火事と流星雨の関連を意中においたものであろう。この日は太陽暦で一六九八年十一月八日に当たるが、現今のしし座流星群は十一月十七日ごろである(この食い違いは主に地球の歳差運動で日付が遅れるため)。

しし座群は母彗星が地球軌道面を通過後三年ほどは大出現がありうるというから二〇〇一年十一月にはまだ楽しみが残っている。ところで流星群や地震などの予報は極めてむづかしいようである。ただ流星群の場合、はずれても人々に実害を与えないことがない点が気楽といえるが、実際に期待外れのときが多いのも事実である。

さて土星だが、昨秋から、おうし座付近で木星・すばる・アルデバランとともに集合し、ひととき賑やかな空をつくっているのが望遠鏡を持つ人は土星・木星を、双眼鏡を持つ人はすばるを眺めてほしい。土星のリングは一段とかたむいて最高である。これらの星の集まりは四月まで見える。夏空に二年ぶりの火星の接近、一―三月には夕空に煌々と金星があるなど二十一世紀当初の夜空には楽しさがいっぱいまつているようである。

ただ、このごろ気になるのは、大気の状態である。私はここ二十年間、度々室戸や芸西など暗い夜空の地域へ出むいてきたが、どうも空が明るくなってきたように思われてならない。星の写真も撮っても、フィルム・カメラなどの性能向上にかかわらず昔撮った写真と比べて見劣りが

する。友人たちも同感だという。太陽黒点の極大のせい、か、公害か公害か、温暖化か、異常気象か、いろいろと考えさせられる毎日である。

対流圏をさけて、世界の天文台は低い地上から競って高所へ建設されるようになってきている。澄んだ夜空で、おうし座に集う星たちの中、一番先に昇る散開星団プレアデスは和名「すばる」(枕草子に、星はすばる、ひこぼし、ゆふづつ、よばひ星すこしをかし、尾だになからましかば、まいて)の名を冠したハワイ島マウナケア山上の「すばる望遠鏡」は世界最大を誇る日本の施設である。昨年八月、東亜天文学会の「すばる」見学会に参加したが、その巨大システムに圧倒されたの一言につきるものであった。果たして宇宙開闢の謎に迫れるのだろうか。四二〇メートルの高地に開いた日本の宇宙の目「すばる望遠鏡」が、ハッブル望遠鏡とは一味違う活躍をするように期待するものである。

では、清少納言ではないが、星はすばるに土星、ゆふづつ、よばひ星すこしをかし、などと……もじつて、その昔をも偲びつつ二十一世紀初頭の空に親しもう。

おかわらけいちろう／芸西天
文学習館講師

新春随想

Serendipity セレンディピティー

澤村 榮一

にかんだのは、二年ほど前に読んだ、「セレンディピティー／掘り出し物を見つける幸運」と題する科学エッセー（『生命誌』19号所収）。

私の愛読誌の一つである『生命誌』は、高槻市にある（生命誌研究館）の機関誌（季刊）で、昨年十一月に出た秋冬号で、通巻28号に達している。

同館の館長は、岡田節人氏、副館長は中村桂子氏。

岡田さんは、京都大学名誉教授。専門は発生に関する研究。国際発生生物学会ハリソン賞受賞（一九八九）によってこの学問の最先端に立つ文化功労者（一九九五）。

中村さんも、DNAやゲノムなどに関する著訳書多数。

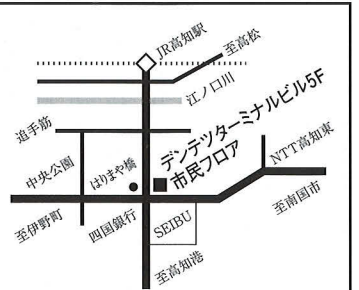
さて、研究館のあらましをご紹介しますところで、話を本題にもどそう。

「セレンディピティー／掘り出し物を見つける幸運」は、堀越弘毅さんの談話にもとづいて、編集部がまとめた科学エッセー。

現職は東洋大学工学部教授。英和辞典によって補足すると、「セレンディピティー」とは、「①（偶然に）そのものをうまく見つけ出す能力、掘り出し上手。②幸運。」

市民フロア

個展・グループ展・会議に最適／



お問い合わせ
助高知市文化振興事業団
☎873-4365

●広さ・内装 約96㎡・壁面布クロス張り
スポットライト完備

●使用料

展示	1日(9時~18時)	11,000円
	1週間	70,000円
会議	9時~12時	4,000円
	13時~17時	5,000円
	17時~21時	5,000円

※休館日 毎週水曜日(搬入・搬出日)
年末年始

私たち日本人にとつて、二十世紀と二十一世紀の掛け橋となる朗報は、白川英樹・筑波大学名誉教授のノーベル化学賞受賞であった。

新聞の解説によると、白川さんの研究は、「二十一世紀の新技术として期待される分子エレクトロニクス発展の起爆剤」であるという。

受賞決定の知らせの翌朝、新聞に、「偶然の生んだ大発見」という大見出しが躍っていた。

ある日、研究生が誤って、通常の千倍も濃い触媒溶液を使ったのが、大発見の発端であった。

ある意味で失敗の実験である。だが、「実験を先入観なく、あり

のままに見る。労をいとわず、しっかりと見る」を信条とする白川さんは、この失敗をきっかけに、「現代の錬金術」を成功に導いたのである。

それは、白川さんが、すでに中学生のころからプラスチックに興味をもち、以来、一貫してプラスチックのことを考えつづけてきたという、知的背景の賜物であろう。

そのような背景があつてこそ、一瞬のひらめき（直感）が、大発見に結びついたのである。

「偶然が生んだ大発見」という新聞記事を読んだとき、まさききに頭

素は、世界中の研究者が、やっきになつて探しても見つからなかったものである。

この酵素の発見とその応用によつて、こんにち私たちが日常生活のなかで多大の恩恵を蒙っている、家庭用洗剤、シャンプー、インスタントめん、チューブ入りの生わさび、臭いよりのチューインガムなど、多種多様な商品が開発された。



季刊『生命誌』第19号より（JT生命誌研究館発行）

ある日、夕暮れのフロレンスの街を、高台から眺めていると、ふとこのような想いが頭をよぎつた。

「ルネッサンスのころ日本は室町時代。日本とフロレンスにはまったく違った文化があつた。お互い知らないからそうなつたのだ……もしかすると微生物の世界にも違った文化圏があるかも知れない……」

何年にもわたつて、考えあぐねたあげくの、（一瞬のひらめき）。

堀越さんは、この（直感）に導かれて、常識やぶりの獨創性を發揮する。

それまで、誰もが当然のことにように思いこんでいた実験上の慣例をやぶつて、アルカリ性の培地で細菌を育ててみたのだ。

この培養によつて、誰も知らなかつた（好アルカリ性細菌）を発見する。

それまでは、細菌学の泰斗パスツールの指示にしたがつて、中性ないし酸性の培地を使うのが、この世界の常識であつた。

そこで、この新発見の菌を利用して、アルカリで、タンパクやデンプンを分解する酵素の探索が始まる。とりわけ、デンプンを分解する酵

堀越さんによると、サイエンスは「直感とロマンと実行」である。

「夢食う男」という異名をもつ堀越さんは、新世紀を迎えて、どのよな夢を食いつづけるのであろうか。また、（現代の錬金術師）・白川さんの研究も、その応用面において、プラスチックの世界を大きく広げ、光彩を放ちつづけることであろう。（さわむらえいいち／高知大学名誉教授）

※表示価格はすべて本体価格です。

中西安男著
やっさんのわくわく動物記
A5判 一九二頁
一、八〇〇円

坂本正夫著
土佐の習俗 婚姻と子育て
四六判 二〇〇頁
一、四〇〇円

山岡 浩著
高知の農業
A5判 二四八頁
一、八〇〇円

外崎光広著
植木枝盛の生涯
四六判 二六〇頁
一、九〇〇円

高知市文化振興事業団編
高知のエスプリ
A5判 一六〇頁
一、一六五円

山本 大著
幕末の青春 坂本龍馬の生涯
四六判 一六八頁
一、一六五円

依光 裕編著
珍聞土佐物語 上下巻
四六判 三九二頁
各、一五五円

外崎光広著
土佐自由民権運動史
A5判 四二四頁
二、七一九円

外崎光広編
土佐自由民権資料集
A5判 三四四頁
三、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩
四六判 二七八頁
一、七四八円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える
A5判 一八八頁
一、一六五円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景
A5判 二三四頁
一、二六五円

筒井広道著
画帳の歳月
A5判 二五六頁
一、九四四円

高木啓夫著
土佐の芸能
B5変 三四六頁
四、八〇〇円

へび探し

門田 智恵美

二〇〇一年は巳年。かわいらしいへびのイラストが街中にあふれています。へびといえばみなさんはどんなへびを思い浮かべますか？ 大きなニシキヘビや猛毒を持つコブラでしょうか？ 地球上には二六〇〇種以上のへびが存在し、日本には三九種類、高知県には八種類のへびが生息しています。

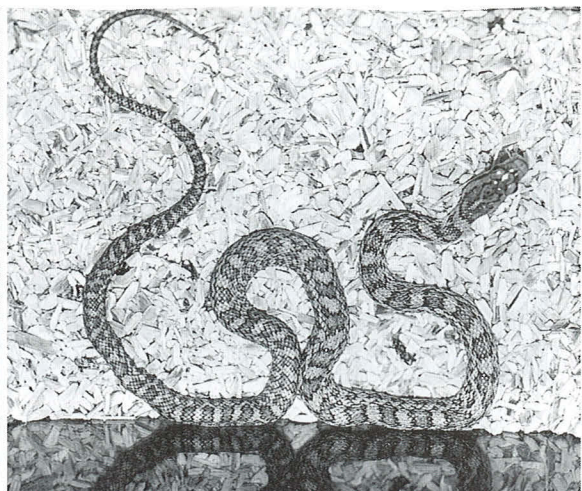
アニマルランドには毎年へびに関する問い合わせがあり、捕まえたへびや殺したへびをマムシかどうか見て欲しいと持ち込まれることもあります。その多くは、アオダイショウの幼蛇（子供のへび）です。アオダイショウは高知県で最もふつうに見られるへびです。成長すると全長2mを超え、ネズミなどの小型哺乳類、鳥類を主食としています。高知市中

心部にも生息していてわんぱくこうちでも確認されています。アオダイショウの成蛇（おとなのへび）は褐色がかかったオリブ色をし、薄い四本の縦じまを持ちます。ところが幼蛇の時ははしご型の斑文で、これが銭形模様といわれるニホンマムシの斑文と似ていることから、ニホンマムシに間違われるようです。アオダイショウに限らず、持ち込まれてきたへびは、捕まえられたときに手荒く扱われているようで傷を負っていることが多く、その傷が原因で死んでしまうことも少なくありません。

確かにニホンマムシのように毒を持ち危険なへびもいますが、へび全部が危険なわけではありません。危険なへびと、そうでないへびを知っていたいただくためにアニマルランドでは昨年、高知県に棲む八種類のへび

をすべて集め「四国のへび展」知られざる隣人たち」と題した特別展を行いました。

さて特別展のために、まずはへびを集めなくてはなりません。外国産のペットにされているへびならベトナムショップで手に入れることもできますが、日本産のへびは自分たちの手で採集することになります。八種類と数字だけを見るとすぐに集まりそうですが、滅多に見ることができないへびも多いのです。その中でも、幻のへびといわれるタカチホへびは、私自身も図鑑でしか見たことがなく、採集



アオダイショウ（幼蛇）全長50cm



ニホンマムシ

することができるといえるかどうかが最大の不安材料でした。このタカチホへび、全長40cm、夜行性で主に地中で生活し、ミミズが主食という少し変わった習性を持つへびです。雨上がりの夜間、地上に出てくることもあるということから、そういった日をねらって夜間のへび探しが始まりました。

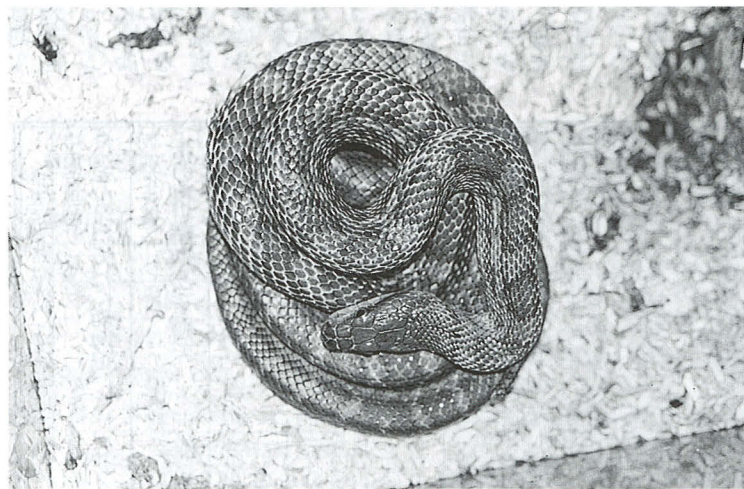
薄もやのかかった夜の山道は気持ちの良いものではありませんが、タカチホへびのために頑張らねばと車をゆっくり走り、目を皿のようにして見回します。あまりに真剣に捜すために枯れ枝や落ち葉がへびに見えてきます。しばらくすると前方に地面を這う細長いものが見えます。「きつとタカチホへびだ」と駆け寄り、目を皿のようにして見回すと、青白く光るシールトミミズでした。高知県ではカンタロウと呼ばれる日本最大のミミズです。さらに辺りを見回すと、たくさんのシールトミミズがいます。大きなミミズがいます。でも、なんだかおかしいなとよく見ると背中一本の黒い線があります。タカチホへびの特徴です。小さなミミズはタカチホへびの幼蛇だったので。幻のへび発見

タカチホへび探しと並行して、そのほかのへび探しも行っていました。雨上がりのその日は日中でしたが、タカチホへびを見つけたことができたかもしれないと、はりきって石やトタンをひっくり返していました。へびはこういった隙間にいることが多いので、しばらく探していると、一緒にへび探しをしていたアニマルランドの獣医が私を呼びます。獣医は手のひらに入るぐらいの石をひっくり返して、その下を見つめています。私もそこに目をやると黒い小さなミミズがいます。でも、なんだかおかしいなとよく見ると背中一本の黒い線があります。タカチホへびの特徴です。小さなミミズはタカチホへびの幼蛇だったので。幻のへび発見

タカチホへびを見つけた瞬間、獣医は、「これで一生分の運を



タカチホへび（成蛇）全長40cm
※幼蛇は青味がかった黒色をしている



アオダイショウ（成蛇）この個体は全長160cm

「使いたした」と周囲から冗談半分に言われています。

へび展は終わり、現在は残念ながらタカチホへびは御覧になつていただけませんが、アニマルランドではニホンマムシとアオダイショウの幼蛇を常設展示しています。この機会に、ニホンマムシとアオダイショウの幼蛇を見分けられるようになってみませんか？

かどたちえみ／わんぱくこうち・アニマルランド飼育スタッフ

こんなことがあったぞね

豪気節が街に流れて

中山俊子

旧制高知高校創立の頃

高知に高等学校が出来たそうなの噂が広がり、教育界は元より一般県民もその実現に期待をかけて待ち望んだ。

高知高校設立準備委員会は、大正十一年に設置され、いよいよ開校となったのは、大正十三年であったと思う。何しろ七十五、六年も前のことだから、年月日の記憶には多少のずれがあるかも知れない。

陸の孤島と言われ、昔は遠流の地となった所であるから、果たして他県から優秀な学徒が来てくれるかどうかという危惧は当事者は勿論、地元の人々にもあったと思われる。

だが関係者や一般の人の心配は杞憂に終わり、全国から続々と受験者が集まって来た。

それは校長先生をはじめ、教師陣に全国的にも名の知られた優れた学識、気骨を兼ね備えた方達が多く、加えて明治維新に活躍した志士達への憧憬あり、また明るい南国の風土風物に若者の意気と血が燃えたこともある。

こうして高知高校は華々しく開校した。この時の一回生の中からは、後に政界、財界に名をなす有能の士が輩出したのである。

その頃私達は女学校の三、四年生で、そろそろ乙女心に人想う頃であったから、少年のような中学生とは違った県外から青年の学生さんが来ると思うと、まだ見ぬ夢に憧れるような胸のときめきを覚えたものである。お城の北に出現した水色の校舎が、殿堂のようにきらめいて、更に新鮮な魅力となって、気の早い友人の中には、通学パスや財布の紐を水色のリボンに換えて、早くもお熱を上げる者も現れた。

今まで見たこともないスタイルの学生が街に溢れた。白線を巻いた学生帽は、色あせたりボロボロに破れていた。腰にはタオルや日本手拭いをぶら下げ、下駄や高下駄を踏み鳴らし闊歩する人もいた。ブックバンドでノートをしばって颯爽と行く姿が何とも格好よくて、早速真似したところ、早々に禁止を食った思いがある。冬になると羊羹色の紋付羽織の豪傑が現れ、釣鐘マントは高校生のトレードマークとなった。

下校時には桜馬場を高校生が通ると言うので、わざわざ升形から北向けに歩いて行く女学生が多くなったと噂になった。

今もその名が残る南溟寮の学生達

が、学園祭や運動会の後など、寮歌一ツトセを歌って、乱舞しながら校庭からお城の下を通り、街へ流れて練り歩くのが名物となった。

当時新京橋から帯屋町へかけて、美人横町とかソプラノ小路などという、清潔なバーや喫茶があつて、勿論私達には縁のない場所だが、高校生達の青春の意気を発散する場にもなっていたと聞いたことである。

豪気節

一つとせ 一人のあの娘が恋しけりや

潮吹く鯨で気を晴らせ

※そいつあ豪気だね

二つとせ 故郷忘りよか若き身に

桂の浜に星がとぶ

※繰り返し

三つとせ 南の海や土佐の国

革命と自由の生れし地

※繰り返し

四つとせ 善し悪し騒ぐは野暮な奴

飲めや歌えやはね廻れ

※繰り返し

五つとせ 意気は尊い血は燃ゆる

黒い女にや慕われる

※繰り返し

六つとせ 無為にや過ぎぬ三年の

元気はみ国の宝なり

※繰り返し

七つとせ 泣いちゃいけない気が弱い

二十世紀に吠ゆる身ぢや

※繰り返し

八つとせ 優しい心もないぢやない

浦戸の浜に鳴く千鳥

※繰り返し

九つとせ この浜よする大涛は

カリフォルニアの岸を打つ

※繰り返し

十とせ 時は永劫ぢや常夏の

土佐の高校の胸の意気

※繰り返し

一回生 余田弦彦作

これは旧制高知高校豪気節記念碑として、昭和四十二年十一月、創立四十五年記念として、桂浜の龍馬銅像の段に建立されたものである。表にはマント姿の二人の学生像、裏面には歌詞が刻まれている。作者の余田氏は熊本出身の方で、ご縁があつて私は三度お会いした。二十五歳の若さで亡くなったとお聞きした。

ロマンス誕生

歌の文句にあるとおり、黒い女に慕われたか慕ったか、ロマンスが実を結んだカップルを幾組か知っているが、その中で一番親しかった友人の話をご披露しよう。

Sさんは年は二つ上であつたが、年の故ばかりでなくとても落ち着い

た面倒見のよい人で、頭もよくお姉さんというよりもおばさんと言つた感じ、特に達筆で、毛筆でラブレターの代筆をして貰つたら、成功率百パーセントだというデマも飛んだ程である。色黒で決して美人の部類に入人ではなかつた。そのSさんが高校生のKさんとうちもおかしいと噂が立つた。なんば言うたち、あのあのおばさんが、と誰も本気にしなかつた。Kさんと言えは眉目秀麗・白哲長身の貴公子で、周りには声楽家のMさん、神戸から転校して来たモダンガールのHさん、兄さんが同級生と言うFさんなどの影がチラチラしていて、どれが本命かと言われたいので、誰も信じなかつた。

ところがKさんが卒業して京都大学に入学し、Sさんは高知市近郊の小学校に就職して間もなく、京都のKさんに毎月学資を送金していると言う話が伝わった。「学資を貢がされて卒業したら捨てられるわ」と口さがない人もあつて心配し

ていたが、なんと四年待つてSさんは目度度Kさんと結婚して、Kさんの郷里に立つて行つた。在高のKさんの友人や私達で心から祝福して送つたことであつた。

何度か人目を忍んでKさんを送つたであろう棧橋で、今日は二人寄り添つて晴れやかに、乗船したのであつた。デッキで手を振る二人の姿が小さくなり、船が山陰に見えなくなるまで見送つた。

最後にSさんが帰郷したのは昭和五十五年五月五日で私は記憶している。この時私は大変不しつけない質問をした。

「Kさんは貴公子で女性にもてたから、あなた色々苦労したろうねえ」。言下にはねかえされた。「そんな心

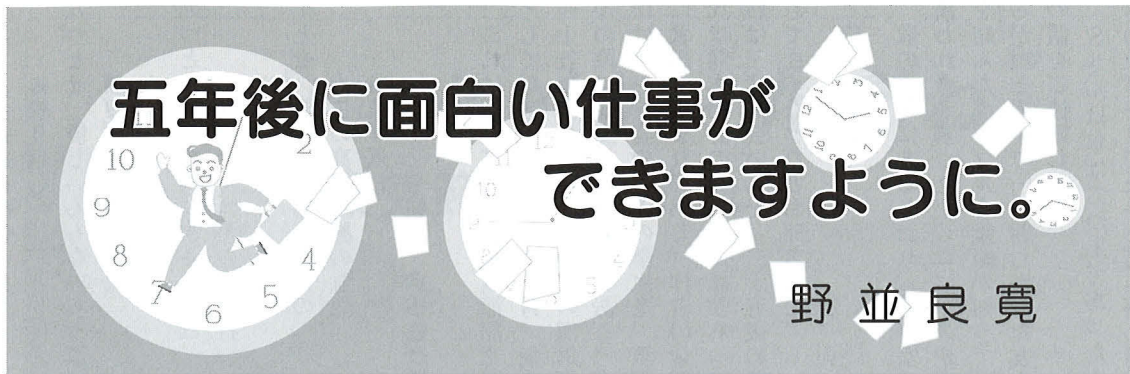
配は一度もなかつたわ。今度生まれ変わつても、また一緒に暮らそうねと言ふの」「ウヘーッ、恐れ入りました」

二男一女をもうけ幸せな家庭であつたと言ふ。高知から帰つて十月に入院し、年明けて十日おくれの年賀状に「外泊を貰つて家族揃つて楽しいお正月を過ごしました。これが最後のお正月です」とあり、四月に入つてKさんから死亡通知があつた。(妻Y子は安らかに静かに一人で旅立ちました。青春の日を過ごした土佐、Y子につながる皆様のこと、生涯忘れません)と。

(なかやまとしこ/明治生まれの主婦)



旧制高知高等学校「豪気節」碑
(井上拓歩「土佐の石摺」より)



野並良寛

二十歳で就職して、はや十五年がたつ。これまでの仕事ぶりを振り返ってみると、五年ごとに大波小波が押し寄せてきて、その都度踏ん張ったり、流されたりしている。

初めての就職はタウン誌の編集者だった。月刊情報誌だったので、毎月の締切はすぐにやってくる。入りたての新人にも容赦なく担当ページは持たされた。取材・原稿・デザイン・版下・カメラをこなす。毎月ごとに担当ページは増えていった。その分、色々なジャンルの方と知り合いになる。これら人との出会いは刺激的で面白く、タウン誌編集者冥利につきた。二十三歳で新刊されたタウン誌の編集長になり、約一年半後に退職。その後自らの事務所を上町に構え、二十五歳でタウン誌の発行・編集人になった。今となってみると、不安よりも楽楽天家の本領である「なんとかなるんじゃない」が勝っていた時期だった。

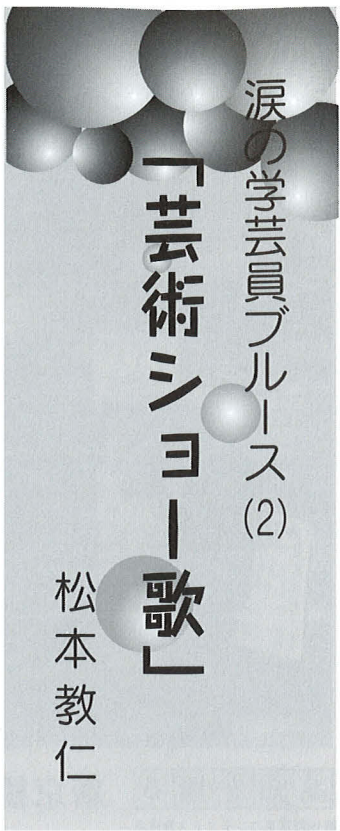
さて、二十五歳前で独立したが、本心は経営者に成りたいわけではなかった。そういった経営欲はなかった。ただ、若者向けタウン情報誌より、もうちょっとだけ高知に足を下ろし、根を張った、二十五歳から三十五歳をターゲットにした内容のタウン誌を作りたかった。そうして季刊タウン誌を丸四年発行する。年に四回しか発行しないので、締切月以外は外部の編集の仕事等とせせとこなした。多くの会社が編集の仕事を手伝って、上町の事務所に入りました多くのスタッフに手伝って

らい、なんとかタウン誌の継続ができた。その当時の全ての関係者に今でも感謝している。
三十一歳から知人の紹介があり、現在の職につく。雑誌編集者から高知県を売るといふ営業をベースにした仕事になった。具体的にはコンベンション(大会・学協会等)の誘致・支援をしている。県をPRしながら、全国大会を開催してもらおうとセールス。クライアントは各種団体や学会事務局が中心だ。今では大切な友人に「自分の会社のとときはるくに営業をせんかつたくせに」と突っ込まれる。

たまたま五年周期で人生の転換期、大波小波がきている。もちろん計画性はない。なんとかなるだろう楽楽天家だけに、面白いほうに進んでしまおう。でも、最初のタウン誌時代があったから自分で本の発行ができた。本を発行すること、外部の仕事とこなすことで多くの素敵な人と出会い、現在につながっている。二十代の自分は精神的や人脈的にある程度の貯金ができている(純粹なお金の貯金はないが)。この五年は少し食い潰している感じはするが、四十歳に面白い仕事をするために、この五年を頑張りたいと思う。

まあ、どんな仕事のステージにあがっても、楽しい気持ちで取り組むことができれば、大波も恐くないものである。

(のなみよしひろ／勸高知コンベンションビューロー)
誘致・支援担当



松本教仁

涙の学芸員ブルース(2) 「芸術ショー歌」

「渡り鳥」小林旭の往年の迷曲〈自動車ショー歌〉がたまたまなく好きだ。たまにカラオケに行くと必ず唄うことにしている。この歌の存在はまさに奇跡だと思う。この歌が生まれた日本は、やはり「神の国」だ。とくに最後のフレーズ「勉強をセドリイ〜イック〜」と一節唸れば、「ああ、オレも四の五の言わず仕事がんばろう」と、枯れたこころの泉にポジティブなうらおいが戻ってくるような気がしてしまう。

というわけで目出度く二十一世紀を迎え、年明け早々からほぼは全力投球で展覧会準備に取り組んでいる(はずである)。というのも今年二月十一日から県立美術館でスタートする展覧会「森村泰昌と合田佐和子」の最終準備体制に入っているからだ。この展覧会は構想段階から数えるとかれこれ三年越しの企画となる。

高知ご出身の画家・合田佐和子さんと、日頃から合田さんのことを「私の芸術上の妹」と呼ぶ大阪の美術作家・森村泰昌さんの二人展をいつかこの手で実現してみたいという思いを、美術館が開館した頃から持ち続けており、一九九七年に担当した「若林奮展」が無事終了した時点で鍵岡館長に企画書を提出、有り難いことにすぐさま了承をいただいた。

無知であるということは実に素晴らしいもので、ぼくは合田さん森村さん両巨頭と一度に仕事をするのがどれほど恐ろしいことなのか、その時点ではケラほども想像できず、お二方からOKをもらったのちに、彼等から土石流のように流れ込



数年前まで鏡川河畔にあった珠玉のオブジェ〈UFO着陸予定地〉(本文とは関係ありません)

んできた展覧会プランの数々に、「これは大変なことになった」と蒼ざめ夜も寝られない…とは大げさだが、まあ困ってしまったわけでは

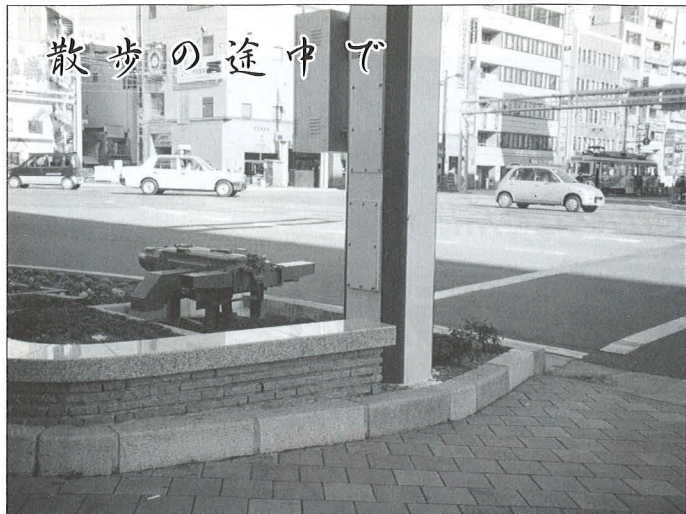
当初、森村さんから提案があったのは「モリムラと合田さんの結婚式」。合田さんとの二人展のオフアアがあった時点で、瞬間彼の頭をかすめたのが「結婚」の二文字だったよう、高知で二人の結婚式パフォーマンスはどうですかという森村さんの提案に、「さて会場は何処にしようか。美術館か。いや、玉姫殿だったら六十九万五千円の予算で開催が可能ではないか(しかも旅行付き)」などと真剣に検討したものであった。あれこれ悩んだあげく合田さんに相談すると「アハハハ、馬鹿ねえ」と一笑にふされてしまい、結局このプランはボツとなった。

他にもこのような話は色々あるが、でもこのお二人の凄じところは、制約の中でものを考えるということは一切しないところだ。やりたいことが必ず先にあり、それに向かって突き進む。現実を理想とする位置まで引き上げてしまおうのだ。

両者とのソフト面の話し合いもさることながら、ハード面での作業も山のように押し寄せてきた。総数三百作品のセレクト、全作品の台帳制作とポジフィルムの用意、大勢の作品所蔵者への出品交渉(これがまた大変)、作品保険額の調整、カタログなど印刷物仕様の検討、輸送展示業者との細かいスケジューリング、作品の事前修復、限られた予算の執行管理等々、やらなければならぬことは、とてもじゃないがこの紙面では書き尽くせない。

しかし苦しいことが多いのに、なぜこの仕事をやり続けられるかと言えば、やはり美術が好きだからだと思う。最後にカッコつけさせてもらって恐縮だが、「好きである」という熱い思いさえあれば、どのような困難も必ず乗り越えられるとぼくは信じている。

(まつもとのりひと／高知県立美術館主任学芸員)



はりまや橋の横断歩道で信号待ちをしていて、この装置に気づく人はどのくらいいるだろう。
「信号の操作に関係するもの?」「道路の振動が騒音、それとも空気の汚染物質でも測定する機械じゃない?」「水門の栓??」推理も人それぞれ。人目を気にしながら装置に近寄ってみると、小さなラベルに答があった。『電気転テツ(=轍)機』。路面電車の走る街をあらためて実感した。

風俗

独断的・内なる敵論

の糾弾であった。今、フェミニズムでは女性自身の意識を問う部分の比重が増しつつある。
文化を推進することは、文化を損なうものへのレジスタンスでもあった。しかし、文化を損なうとされる事象自体もまた一つの文化であると気付くようになってきた。

かつて、環境破壊と言えば、国の大規模プロジェクトであり企業の公害たれ流しであった。今、環境問題では家庭排水や個人の消費生活のあり方が問われるようになってきた。
かつて、ウーマン・リブと言えば、女性差別の社会機構であり、男性の無理解横暴

また、中央対地方の図式でも多くの論議があった。だが、中央の権威主義よりも数段始末に悪いローカリズムがあり、大組織よりも中小グループに排他性の強い傾向がある。大ボスの寛容さに比して、小ボスの独善頑迷が極まる事例も多く見ている。
大きく構えるなら二十世紀は、資本主義社会主義各々の国が、自らの内部矛盾をいかに解決するか試行錯誤を重ねた時代だった。その延長線上での今世紀は、それぞれの「内なる敵」をいかに止揚するかの時代になる。
そのからみで言えば、私は戦後半世紀の高知の文化で最も評価できるものが盛夏の鳴子踊だと思っているが、その原動力は、創始者としての功績は別として、地方楽壇の権威者であった作曲家の原型から若者中心に完全に自由になったことから始まったのではないだろうか。(南北)

第11回 高知出版学術賞 推薦募集

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。
①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
②2000年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会まで提出して下さい(図書は返却しない)。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

【締切】

平成13年1月31日(水)

【表彰】

3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】

文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会

今号の表紙

「一步前進」 饒 永

古代中国・殷代の文字である甲骨文字を用いて「一步前進」と刻した。「歩」字は左右の足跡を重ねた形で、交互に前へ歩行することを意味する。せめて一歩だけでも歩み寄れたら——人生において、或いは人間関係において、物事を前向きに考えた上で、一歩を踏み出すことはなかなか容易ではない。新しい年を迎えるにあたり、この言葉をモットーとして掲げたい。(あい せい・書家)



現大丸デパートの前の風景。

高知を撮る 新京橋埋め立て(昭和40年頃 高知市)

第16回写真コンテスト入賞作品

清岡義道

昨秋、村上春樹氏が、「またたび浴びたタマ」という「究極の回文五十音フルタ」を出して以来、回文がちよっとしたブームになっているらしい。
江戸時代には、よい初夢を見るために、枕の下に敷いた「宝船」という縁起物があった。
多くは、米俵・宝貨を積んだ帆掛船の絵に、七福神を描き、つぎのよくな回文歌を書き添えた、という。
なかきよの とおの
ねふりの みなめさめ
なみのりふねの おと
のよきかな(長き夜の
とおの眠りの 皆目覚
め 波乗り船の 音の
良き哉)(広辞苑)

回文

風俗歳時記



干支を含まないものでは、
いえのそと かどまつまどか とそ
のえい(家の外 門松まどか 屠蘇の酔)(土屋耕一)
土屋氏は回文の名手で、『軽い機敏な仔猫何匹いるか』という回文集を出している。
冒頭に挙げた、村上氏の著書もそうであるが、この書名自体が、回文になっているのは言うまでもない。
島村桂一氏も名だたる達人。
同氏の手になる、
〈各句回文歌〉では、
五七七七七のそれぞれの句が、回文になっている。

おつぎは、今年の干支である「巳」を読みこんだ賀春の句。
みのとしを いわいさいわいをし
とのみ(巳)の年を 祝い幸 愛しと飲
み(島村桂一)

うたうたう はなみのみは いよ
よよい きおいはいおき うまくよく
まう(唄う)たう 花見の皆は 愈よ酔
い 気負い杯置き 上手く良く舞う)
(上野富美夫編「回文 ことば遊び辞典」)
(朴)

21世紀の市民文化の拠点

「高知市文化プラザ」

平成14年4月オープン予定



「高知市文化プラザ」イメージ図

高知市が現在九反田に建設中の「高知市文化プラザ」は、平成14年4月の開館に向けて、工事が急ピッチで進められています。

この施設は、平成7年の基本構想段階から文化団体や市民の皆さんと意見交換を重ねながら計画してきたもので、市民文化の発表、観賞、学び、交流など、文化創造と生涯学習の拠点として大きな期待が寄せられています。「高知市文化プラザ」の管理運営には、(財)高知市文化振興事業団が当たることになりました。

ご利用のお申し込み受け付けは、文化ホールは平成13年6月1日、ギャラリーは同年8月1日から開始します(中央公民館については追ってお知らせします)。なお、公演が3日以上催しや四国大会規模以上の大きな会議や催し、大規模あるいは長期間の展覧会等につきましては、現在相談業務を行っています。

●大ホール 最大1,085席

コンサートから演劇まであらゆる催しに対応できる多機能ホールです。

●小ホール オープンステージで200席

小劇場、イベントホールとしてもご利用いただけます。

●市民ギャラリー 大小5室

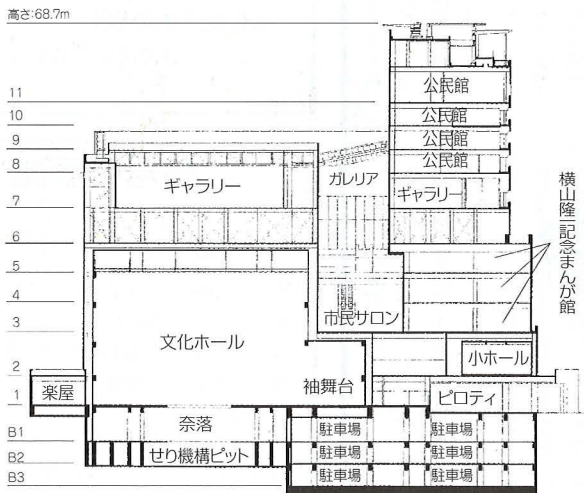
約500㎡の2つの展示室は連結使用が可能。個展に最適な小規模展示室もあります。

●横山隆一記念まんが館

高知市名誉市民横山隆一氏を顕彰するとともに、全国にまんが文化を発信していきます。

●中央公民館

大会議室、和室、美術室、音楽室、調理室等



高知市文化プラザ構造(断面)図

◎申し込み方法、料金等詳しいことは文化振興事業団へお問い合わせ下さい。